

「ん……、あ……。ここは……？」
「目が覚めたか」

真琴が意識を取り戻した。
少しぼやけ気味の頭を働かせて、目の前にいる男の顔を思い出す。

「テメェは……あの時の……」
「佐久間幸一だ。これからお前の検査をするからあまり動くなよ。動けないとは思うがな」

幸一はマッサージ師が着るような医療用のユニフォームを上下に着ていた。

「くっ……!! 身体が動かねえ……!!」

真琴がいるのは幸一の調教室だった。
その部屋は中々に広い部屋で、ドアは電子ロック付きの厚みのあるドアであり、簡単には部屋を出入りできないようになっている。部屋の中央にはキングサイズのベッドが置かれ、そのすぐ隣には高さが60cm程の台があり、壁際には様々なアダルトグッズが置かれている棚があり、壁はエナメル質のようで、部屋全体を照らす照明により黒光りしている。部屋の片隅には天井まで届く仕切りで囲まれ、ドアがついた場所があり、そこはどうやらトイレらしい。

室温は丁度良く、寒くも暖かくもなかった。

真琴は髪型はそのままのままであったが、着ていた制服、下着を全て脱がされ、全裸だった。

瑞々しい太股があらわとなり、くっきりと見える理想的なくびれ、豊満な乳房に大きすぎず小さすぎない乳首、全てのバランスが整っており、女性が憧れるであろう肉体美を体現していた。

そんな無防備な状態であっても、鋭い目つきのせい、どこか狂暴そうな雰囲気を感じるが、その狂暴性が発揮されぬように真琴は拘束されていた。

彼女が拘束されている場所はベッドから少し離れたところ。

天井から下がっているロープが両手首を結び、両腕を吊り下げている。

しかし足には何も拘束がなかった。

故に真琴は足で目の前にいる幸一に蹴りをお見舞しようとしたが力が入らなかった。

「力が入らないだろう。筋弛緩薬を打たせてもらった」

「くっ……」

(クソ……、薬か。通りで全身に力が入らないわけだぜ)

足に力が入らないので真琴の腰は少し引け、身体は緩い、くの字を描いている。

幸一は屈みこんで、真琴の秘部をじっと見つめる。

「な、なんだよ……」

今まで小夜しか見たことのない己の秘部を、誰とも知らぬ男に見られる現状は、真琴にとって恥ずかしいことこの上なく、真琴の声が恥ずかしさで僅かに震え、見る見る内に真琴の顔が赤くなっていく。

「ほお、よく手入れされている。それに綺麗なピンク色だな」

真琴の陰毛は一定の量を保ちつつ逆三角形の形に整えられ、不衛生感はなく、しっかりと手入れがされており、幸一は真琴の性格から陰毛が生え放題だと思っていたが、予想をいい意味で裏切られた。

さらに陰部の色合いは非常に美しく、暴いてはならぬ領域を暴いてしまったかのような、後

悔すら一瞬感じるほどの美しさだった。

生え始めた当初は面倒くさく、手入れを十分に行ってはいなかったが、それを知った小夜から身体の手入れの仕方を耳にタコができるくらい、しつこく言い聞かされ、陰毛が生えそろ

う前から手入れを始め、いつしか習慣となっていた。

ちなみに小夜が口うるさく行った理由は、真琴の美しい肉体をより引き立たせたかったからだ。

「どれ」

「ひあっ……!!」

幸一は真琴のぴっちりとしたマン筋をすっとなぞり、くぱあと右手の人差し指と中指で広げる。

「処女膜はないか。あれだけ激しく動いていられないのも当然だが」

「てっ、テメエは何がしたいんだよ!!」

展開についていけず、たまらず真琴が叫ぶ。

「お前を調教して男に媚びる雌に仕立て上げるんだ」

「はあ？ 何を言って……」

「簡単には堕ちてくれるなよ」

「おっ、おいッ!」

真琴を完全に置いてけぼりのまま、幸一は棚に向かい、瓶を取り出し、台に置く。

そして台を真琴の近くに運ぶ。

「これはマッサージオイルだ」

「マッサージオイルだと？ まさかアンタが私にマッサージをしてくれるのか?」

「そうだ。俺がお前にマッサージをする。ただ、このオイルは様々な薬草を混ぜた特注品だし、マッサージもただのマッサージではない」

幸一は瓶の蓋を開けて、まず真琴の乳房に垂らす。

「つつめた……!!」

そして自分の手に垂らし、良く馴染ませ、真琴の乳房に垂らしたオイルを満遍なく、乳房と乳首に馴染ませるように塗っていく。

「張りや弾力は完璧だな」

「ん……、そりゃどうも」

「感度は普通か」

幸一は真琴の背後に回り、真琴の乳房の下から掴み、感触を確かめるように間隔を置きながら乳房を揉み込む。

(なんなんだよ、この状況は……。あー、クソ。めっちゃ恥ずい……)

真琴は胸を揉まれるという状況に、恥ずかしさで紅潮した頬がますます紅潮し、抵抗しようにも抵抗できない、もどかしさを感じる。

「く……本当に何がしたいんだか。私を犯したいんじゃないのか?」

捕らえ上げ、女を裸にした男がすることは、無防備な女をレイプすることではないのか。真琴自身、学校をよくサボっていたため性知識にそこまで詳しいわけではないが、クラスの不良や、襲ってきた男たちがよく口にしていたので、てっきり目の前の男もそうするものだと思っていた。

「まずはお前の肉体を相応しいものにするのが先だ。俺好みのな」
「んう……ああ……」

幸一は揉み方を変え、指を細かに動かしながら揉みこんでいく。
揉むたびに真琴の乳房はむにゅむにゅりと形を変え、その柔らかさがよく分かる。

「ふ……く……。こ、こんなことして楽しいか？」
「楽しい……か。まあ、楽しいな。花開いたお前の肉体を楽しむことを想像すると特にな」
「変態がッ!!」

そう吐き捨てる真琴を無視しつつ、今度は手のひらで側面から乳房を押しえつけ、グニッグニツと二つの乳房をお互いに押し付け合わせる。
そして乳房を押し付け合いながら、乳房をこねくり回し、オイルがヌチャヌチャと音を立てる。

「ふあ……クッ、ソ……」

部屋の温度は適温だが、真琴の身体からはじんわりと汗が出始める。
幸一はこねるのを止め、両手で右乳房の根元を掴むと、牛の乳を搾るようにぎゅううっと乳房を伸ばすように両手で引っ張った。

「ふくう……!!!」

真琴が微かに顔を歪めて、痛みで声を漏らす但那なことはお構いなしに、幸一はそれを2、3度繰り返して、乳房を下からむんずと掴んで巧みな指使いで揉みこんでいき、今度は左乳房に同様のことを行った。
乳房を数度絞って、胸を揉みこみ、今度は片方の乳房に同様のことを行うそのルーティンを繰り返すたびに、乳房の感度は上がっていき、いつしか痛みを感じなくなり、じんわりと、なんとも言えない感覚が真琴を襲い始める。
そしてそのマッサージが1時間ほど行われると、明確に真琴の乳房は変化していた。

(な、なんだあ……?)
「はあ、んはあ……」
(変な……感じだ)

声に僅かな艶が籠り、乳房からはピリ、ピリと、まだ弱い甘い快感の電流が肉体へと流れ、乳首がムクリと起き上がり硬くなっている。
幸一の巧みな指使いは、感じたことのない真琴の乳房を覚醒させた。
多少はオイルの効果もあるが、2、3日これを繰り返せば真琴の乳房は揉まれるだけで感じるように変化するだろう。

「感じてきたな」

幸一は真琴の耳元でそっとささやく。

「ひうっ……!! ビックリさせるなよ!!」

幸一の吐息に驚く真琴だが、ただ驚いただけではない。

「成程な」

幸一は真琴の右耳に優しく息を吹きかける。

「ひにゃあッ!! なッ、何すんだッ!!」

真琴は可愛らしい声を出し驚くが、それだけでなく息を吹きかけられ確実に感じていた。

「耳が敏感らしいな」

幸一はそう言って、真琴の耳たぶを唇で咥え、優しく刺激を与える。

「んひっ……!! ひやめッ……ろお……」

それと同時に胸を揉む指の動きを激しくさせていく。

「んあ……はあ……ひいい!! 耳止めろっての!!」

「気持ちいいだろ?」

ここで耳たぶが吸われ、

「——あぁッ!? んひいッ!!」

と、真琴は素っ頓狂な悲鳴を上げてしまう。

その声を聞いて幸一は内心ほくそ笑むと、耳たぶを吸うのを止める。

「なかなかいい悲鳴だったぞ」

「うっせえ!! 死ねッ、変態!!」

カッとこみあげてくる恥ずかしさに従って真琴が幸一を罵倒する。

その罵倒を幸一は華麗に無視をし、再び質問する。

「で、どうだ? 気持ちがいいだろう?」

その質問に真琴は、果たして耳のことなのか、それともムズムズと感じる胸のことなのか分からなかった。

自分から胸のことか? 耳のことか? と聞くのも恥ずかしく、真琴はとぼけることにした。

「なんの話しだ?」

「胸だ。だんだんと気持ちよくなってきているだろ」

「……フン。こんなのオナニーしてた方が気持ちいいぜ」

「そうか。そういえば、オナニーする頻度はどれくらいだ?」

「はあ?」

突然の意味の分からぬ質問に、間の抜けた声が漏れる。

「なんでそんなことをテメェに言わなくちゃなんねんだよ」

「いいじゃないか、それぐらい。それに俺の質問には大人しく答えた方がいい。妹がどうなっても知らんぞ」

幸一は妹を盾に真琴を脅した。
その効果は絶大で、あっさりと自らの恥部を幸一に話す。

「.....月に一回くらいだよ」
「以外に少ないな。お前の妹はどうだ？」

今度は小夜のことについて尋ねた幸一。

「.....知るわけねえだろ」

そう答える真琴だが、本当は知っている。
小夜が何回自慰をやっているか。
しかし、妹第一の真琴にとって、小夜の恥部を離すことは自分の恥部を話すことと訳が違う。
真琴にとって幸一に話すことは、妹を裏切るのと同じだ。
だから誤魔化す。
自分は知らないと。

体験版はここまでとなります。